



「乳児の発達」

—写真でみる0歳児—

J.H. de Haas 監修・高橋孝文監訳・整肢拓桃園医療部訳

本文中、本書の目的が監修者 Haas によって次の様に述べられている。“お父さんお母さんに乳幼児の発達について知ってもらうこと”。“従来の育児以上に、より生物学的観察力にたけた育児の基礎を与えること”。“子どもの成長発達に対する興味をおこさせること”、となっている。しかも全部で126ページの本書中 86 ページは写真であり、非常に平易な育児書でもある。小児神経発達学の権威者として知られるオランダの J.H. de Haas の門下生が作成したこの写真集は、フランス語と英語版に訳され世界各地の小児発達研究者に受好されている。これまでに多数の小児発達に関する本が刊行されているが、首がすわって寝返えりができて、坐れる様になって四つ這いができて立って歩ける様になるといった階段的または、直線的な論述が多い。乳児はある一つの動作が可能になった発達段階では、同時にまた様々の動作を示

すものである。本書では同時に発達する動作パターンの競合性が強調されている。ボバース・アプローチ講習会では London では勿論、我国のコースでも教科書として本書を用いて、発達における競合の概念を強調している。第1章の序論より始まり第II章1歳までの運動発達、第III章目の動きと手の動作の発達、第IV章0歳児の食べ方と飲み方の4つの章に便宜的に区分してある。正常人の日常的な動作が、どのような基本的能力によって形成されてきたか、具体的に考察する事によって PT, OT, ST, のセラピイがより現実的なものになる。そういった意味でも発達障害児に関係するセラピストにだけでなく、広く一般的な医療人にとっても良きハンドブックとなり得る本である。

(A 5, 126 頁, 医歯薬出版, ¥ 1500, 1977)

(聖母整肢園 理学療法士 紀伊克昌)

「失語症の歌」

—手記 脳外科手術患者の復権—

山田 彰 一 著

副題にもあるように、本書は脳外科手術を受けた著者が、その後遺症のリハビリテーション過程を通じて、障害を克服し、再び一人の人間として生きていく権利を勝ち得るまでの長い闘いの歴史を記したものである。

表題は「失語症…」となっているが、事実著者が受けた後遺症は、ゲルストマン症候群という失行症・失認症の一形態に含まれるものである。近年、こういった高次脳機能障害を有する患者のリハビリテーションが、その可能性を含め論議されてきているが、未だ阻害因子としてのみ強調される傾向が強くなり、一部では懐疑的な態度がとられている中で、本書が出版された意義は大きく、またそれが一患者の手によってなされたという点、説得力があり貴重な意味をもつものである。

本書の内容は大きく二つに分けられている。一つは、障害を受けてからそれを克服するまでの過程、すなわち37歳という若さでクモ膜下出血で倒れ、手術を受けたその日から身体的障害とともに、著者にとっては全く不当な形で奪われてしまった生きる権利（社会的失権）

を、奇跡的といわれるまでに回復させた復権への歩みが力強く記されており、読む者を引きつけずにはおかない。また高次脳機能障害を有する患者に日々接している私にとって、そのリハビリテーションの詳細な記述も興味あるものの一つであり、得るところが多かった。さらに、本書を構成するもう一つの重要な部分は、著者の職業である障害児教育における教師としての生きる闘いについて記されている所である。障害児教育あるいはリハビリテーションとは、障害者本人が自分自身を復権する事、すなわち著者のいうセルフリハビリテーションを意味するものであり、またそれが人間を「価格」で量る社会に対する力ある主張となる事を、著者自身の体験の中から生み出している。

リハビリテーションおよび障害児教育に携わるスタッフに限らず、広く一般の方々にも進められる良書である。

(B 6, 190 頁, ふどう社, ¥ 980, 1978)

(神奈川総合リハビリテーションセンター 心理科

宮森孝史)